

「又エのいた家」

小谷野敦

「俺は死ぬ、死ぬ」と騒ぐ
父親に「おれ、おれなら、死ぬ」と心の中でつぶやきつつ、

父を追う
阿部公彦



文藝春秋 1300円＋税

何年前か、ある文章の中で小谷野敦氏の書いたものに触れようとしたら、担当の編集者から「やめた方がいい」といった旨のことを言われた。細かなニュアンスは忘れたが、面倒なことになるから、というような話だった。「迂闊に触れない方がいい」とアドバイスされる人物はときどきいる。たしかに反論があったり意見が合わなかったりしたときに電話をかけて相手に文句を言ったり、裁判沙汰にしたりといった行動をとる人は「近づかないほうがいい」「面倒臭い」といった印象を与えるものだ。公になった著作に対する批判は正当な権利だろうが、小谷野氏の場合、事実誤認の指摘などの射ていることもある反面、揚げ足取りや単なる恨み節と思えるものもある。芥川賞落選後の選考委員や受賞者に対する

ネット上での悪態には唖然とした人も多いだろう。もちろん、小説作品をとりあげるからには、そういうことはひとまず切り離して考えたい。この「又エのいた家」は、「母子寮前」に続いて芥川賞候補になった小谷野氏の自伝的作品である。「母子寮前」は雑誌掲載時には読み終わるのが惜しいほどの気持で大事に読んだ記憶がある。母親の闘病を描いた作品だったが、主人公の決して格好よくはない生き様の向こうに母親との関係が見事に浮かび上がり、一生に一度しか書けない作品とはこういうものかと思ったほどである。芥川賞は候補止まりだったが、受賞した西村賢太が、自分の「母子寮前」にはかなわないと思ったなどと受賞後のエッセイで書いていて（あの

西村賢太がである、ちよつとした感動を覚えてきた。「又エのいた家」はその「母子寮前」の続編である。焦点は母親から父親に移る。病を発した母に暴言を吐き、みつももない行動をとった父親は、母の死後急速に体力も気力も衰え、孤独な死を迎える。その軌跡を「死んでまた生かす呪いの言葉」を吐きながら、それだけには収まらない複雑な思いを抱いて語り手が見つめるといふのが作品の本筋である。視点は「私」に密着。作品の大部分を構成するのは、両親とのかかわりの中で「私」がどのように立ち、悲しみ、怖れ、暗澹たる気持ちになったり、呆れたり失笑したりしながら成長したかという人生の軌跡である。幼少時の回想を通し、自身の「心」の成立の裏事情

に何とか言葉を与え整理しようとする語り手の悪戦苦闘ぶりから小説の力が生まれる。単行本化に際しあらためて読み返したが、やっぱりいい小説だと思った。雑誌掲載時にはラストに不満があったが、修正されてよくなった。

もちろん、決して爽快な作品ではない。どこか荒涼とした気配を感じさせる北関東の町を舞台に、裕福とは言えない家の長男が、家族の期待を背負いながら高学歴を得、やがて両親のつかった安っぽい文化に違和感を覚えながらも自身の中にその痕跡を認めないわけにはいかない、そんな経過がどこか決めつけ的で息苦しい文章で強引に語られる。読者として見ると、エゴむきだして気難しく面倒臭い、自身の弱さにはこだわりのに他者の弱さには冷淡、神経質で、狭量で、記憶の力だけは異様に執念深い書き手に付き合わされているという印象である。

なんだ、これでは小谷野敦氏のまんまではないか、とも思う。

でも、小説になるとこれがいいのだ。そこが小説の怖いところだ。おそらくこのように書きぶりをとることで可能になるのは、「私」のこわばった声の間から異質の何かを漏れ出させることである。その「異質の何か」と

は、他でもない父親である。父親に対し「又エ」という呼び名を使っていることからわかるように、「私」ととっての父親はとにかくとらえどころのないわかりにくい存在。暴君でも権威でもない。むしろみつももなく情けない、学歴もないし、知性も品格も感じられない凡庸でいじけた男。でも、「私」とは違って若い頃は美男子でスポーツも得意、愛人さえいたらしい。「私」がかつて憧れたのかもしれない異人種なのだ。江藤淳が「成熟と喪失」で描こうとした、近代日本の「恥ずかしい父親」像と重なりそうでも重ならない微妙なねじれがここにはある。

つまり、この作品からにじみ出すのは父親のしぼとさなのだ。描出したとは言えない。勝手に濡れ出てきた感、である。語り手が罵り、否定し、ときには分析したり引用したりしても到底、この父親を組み伏せることはできない。その証拠に父親の死に目を「私」は知らない。きつとどこかでまだ生きていて、「ウナギ、バナナ、刺身、塩辛、渡後草」など食べたいものをファックスで送ってくるに違いない。

私小説的作品では、いかに科白を的確に拾うかが勝負になる。生死不明だと周囲が騒ぎ出したときに父親が電話口で発する「何だあ

ー、オラ生きてるよー」との声は秀逸だし、おそらく小説中でも数少ない息をつける箇所は、父親の納棺の場に到着した「私」に対し、妻が笑って「いま又エさんそこにいるよ」と言う場面だ。妻は父親に対する「私」の感情を理解し「又エ」という呼称も採用するが、あくまで「又エさん」なのである。絶妙な距離感ではないか。「私」にかわって父親の面倒を見てきた妻が、「私」にとつてどれくらい大きな存在なのか、このひと言でよくわかる。不満もある。妻が描かれ足りない。この妻、実はかなりタイプな人では？と思わせるくらいまで書いていたらすこかったのに、とも思う。最後の妻の科白もまだ今一つだ。妻に対するこうした手加減した書きぶりのせいで、読者には息苦しい思いをさせるわりに、書き手が実はどこかで楽に呼吸しているのではなにかと思わせる。頻出すサブカルネタや時代ネタもときにやや安易で（コロクはよかつたが）、作品の緊張感を弱めている。何より、ここまで自己憐憫が強くて他者に対し不寛容なのはいいかなものか。でも、困るのは、そんな狭量で面倒くさいエゴの強い人の、怨念のこもったしつこい語り口が、まさにこの小説の魅力とも直結しているということなのである。